

要 旨

本研究は、文学的な文章の学習において、物語の特徴を考えて読むことのできる児童を育成するために、複数の教材を読み比べる学習指導の在り方を探ったものである。まず、学習のねらいから捉えさせたい物語の特徴を絞り込み、関連教材を選定した。教科書教材と関連教材を、「読み取りの視点(着目点)」を基に読み比べ、更に類似点・相違点に着目させ、物語の特徴がより明確になるようにした。これらの手立てをとることで、児童は物語の特徴を考えて読むことができるようになってきた。

〈キーワード〉 ①物語の特徴 ②複数教材 ③読み取りの視点 ④類似点・相違点

1 研究の目標

文学的な文章の学習において、物語の特徴を考えて読むことのできる児童を育成するために、複数の教材を読み比べる学習指導の在り方を探る。

2 目標設定の趣旨

学習指導要領の国語科では、中学年「読むこと」の目標「内容の中心をとらえたり段落相互の関係を考えたりしながら読む能力」について、「目的に応じていろいろな本や文章を分析的に読み、内容の中心をとらえたり、段落相互の関係を考えて全体の構成を把握し、自分の考えをまとめたりしながら読む能力」<sup>1)</sup>と説明されている。また、文学的な文章の解釈に関する指導事項では、各場面の様子に気を付けながら場面と場面とを関係付けて読むことや各場面を構成する要素である登場人物の人物像を中核に読むことが示されている。つまり、中学年においては、物語全体を通して、話の展開、登場人物の人間関係や役割などの特徴を分析的に読むことが大切であると考えられる。

所属校3年生においては、文学的な文章のワークシートや評価テスト等を見ると、教材文の時・場・人などを捉えることはできるものの、叙述を基に場面と場面を関連付けて読んだり、登場人物の性格や気持ちの変化などを考えながら読んだりすることに課題が見られる。自分自身の実践を振り返ってみると、一つの教材文を場面ごとに詳しく読み取り主題に迫るといった授業展開をし、教師の教材解釈に誘導する授業が多かった。このような教師の指導は、児童の読みを画一的にし、物語全体のつながりを捉えた読みができない要因になっていたのではないかと思われる。

これらのことから、物語全体を俯瞰的に捉えながら、叙述を基に分析的に物語の特徴を読むことができる授業を仕組んでいく必要があると考えた。そこに、複数の本や文章を読み比べる学習を取り入れれば、それぞれの類似点や相違点から、児童は、より明確に物語の特徴をつかむことができると考える。

そこで本研究では、研究テーマ、研究課題を受け、文学的な文章の学習において、複数の教材を読み比べる学習指導の在り方を探っていく。読み取りの視点を設定し、複数の教材を読み比べる学習指導を行えば、児童が、物語の基本構成、登場人物の人間関係や役割などを考えながら読むことができるであろうと考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

文学的な文章の学習において、読み取りの視点を基に叙述を焦点化し、複数の教材を読み比べる学習を行えば、物語の特徴を捉えることのできる児童を育成することができるであろう。

#### 4 研究方法

- (1) 複数教材を取り入れた指導に関する理論研究
- (2) 関連教材選定と読み取りの視点の設定
- (3) 所属校3年生の授業実践と検証

#### 5 研究内容

- (1) 先行研究や文献を基に、複数教材を取り入れた指導の手立てを明らかにする。
- (2) 関連教材を選定し、読み取りの視点を設定する。
- (3) 所属校の3年生における「読むこと」の実態調査を踏まえて、「木かげにごろり」(3時間)と「手ぶくろを買いに」(3時間)の授業実践を行い、仮説を検証する。

#### 6 研究の実際

- (1) 文献等による理論研究

##### ア 複数教材の活用

複数教材を取り入れた授業実践は数多く行われ、その有効性が確認されている。永池は「複数読むことによってこそ、それらの作品の持つそれぞれのよさや価値が際立ち、組み合わせたからこそその作品理解が深まり、認識力の確かさを生む。」<sup>2)</sup>と複数教材を用いて文学的な文章を指導することの効果にふれ、さらに、多数の実践を通して、「共通点・相違点が思考の切り口となり、思考の高まりを生み、文章や筆者へ鋭く迫ることができる。」<sup>3)</sup>と述べている。山下は、小学校段階で複数教材を活用する意義・目的の一つとして、「読みの着目点をもって読む中で、情報を取捨選択し、吟味し、再構築するという読解力を育成することができる。」<sup>4)</sup>と述べている。

以上のことから、複数の教材を、読みの着目点(以下、「読み取りの視点」とする)をもって読み、類似点・相違点を思考の切り口にして読み比べることは、それぞれの物語の特徴を際立たせ、児童により明確に捉えさせることができるのではないかと考えた。そこで、文学的な文章の学習において2つの教材を読み比べる学習指導の在り方を研究していくこととした。

##### イ 複数教材を取り入れた単元指導計画の類型

永池は、「教材と教材の『つなぎの学習』をいかに仕組むか、そのためには、教材や学習の何を関連させるか。内容や活動の関連を児童の学習意識を大切にしながら、教材のつなぎができるように単元設計がなされなければいけない。」<sup>5)</sup>と述べている。

また、山下は、これまでの先行実践を基に複数教材を取り入れた単元指導計画を、4つに分類している(図1)。

これらのことから、児童の実態や単元のねらいに応じて、教科書教材と関連教材のつなぎ方や位置付け、軽重などを考えて提示する必要がある。物語の特徴を考えて読むためには、比べて読むことでそれぞれの内容が明確になり、構成や表現の効果・工夫に気付くことができる「並行提示型」が有効であると考えられる。本研究では、対象学年が3年生であり、複数教材を取り入れて文学的な文章を読む経験が初めてであ

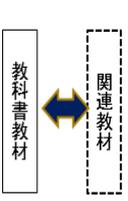
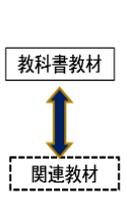
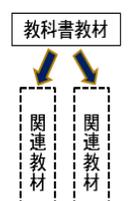
	導入提示型	並行提示型	順次提示型	発展読書型
類型				
活用	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆教科書教材への興味づけ</li> <li>☆単元を通して図書資料を意識化</li> <li>☆学習課題やテーマに気付かせる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆それぞれの内容が明確</li> <li>☆構成や表現の効果・工夫について気付く</li> <li>☆複数の情報を得る大切さやおもしろさを実感</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆「並行提示型」が難しい場合や比べ読みに慣れていない段階に適する</li> <li>☆関連教材を主体的に読みとる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆最も一般的</li> <li>☆自分で課題や目的をもって図書を選び、読書につないでいく</li> </ul>

図1 単元指導計画の類型

ることを考慮すると、「順次提示型」で学習し、内容を読み比べていけば、教材が2つになる抵抗感もなく物語の特徴を捉えることができると考える。

## (2) 児童の実態把握

授業実践を前に、児童の読みの実態調査を行った。物語文「泣いた赤鬼」で、「場面分け」「状況の変化」「登場人物の心情の変化」について調べた。結果は、場面分けができた児童は全体の88.5% (23人)、状況の変化を読み取ることができた児童は69.2% (18人)であったのに対して、登場人物の心情の変化を的確に読み取ることができた児童は、わずか11.5% (3人)であった。このことから、場面の移り変わりに注意しながら、状況や心情の変化を捉えることに課題があることが分かった。そこで、捉えさせたい物語の特徴を「状況や心情の変化」に絞り、複数教材を取り入れ、理論研究を踏まえた単元を計画し、授業実践することにした。

## (3) 検証授業について

単元名	「物語の特ちょうを捉えよう」		(平成26年2月実施)
教科書教材	「手ぶくろを買いに」	新美南吉作	東京書籍3年生下
関連教材	「かさこじぞう」	岩崎京子作	東京書籍2年生下

教科書教材「手ぶくろを買いに」は、新美南吉童話の中で広く読み親しまれている作品である。物語の構成は、子ぎつねの雪との出会いから始まった1日が、場所を変えながら時間を追って描かれており、児童は登場人物の視点に立って気持ちを想像しながら読み進めることができると考える。よって、場面の移り変わりに沿って登場人物の心情の変化をつかみやすい教材である。

関連教材には、「かさこじぞう」を選択した。選択した理由は、2年生での既習教材であることと、教科書教材「手ぶくろを買いに」の中心人物である子ぎつねの気持ちが少しずつ変化するのに対し、関連教材「かさこじぞう」は、じいさまとばあさまの生活の状況が一気に変化しているため、類似点や相違点を見付けることで、「変化しているもの」や「変化の仕方」に違いがあることが分かりやすいと考えたからである。

### ア 授業の構想

本単元では、物語の特徴である状況や心情の変化を捉えさせることをねらいとする。そこで読み取りの視点を「一番大きく変わったことは何か」「それはどのように変わったか」「それはどうして変わったか」を設定し、2つの教材を同じ視点で読んでいく。そして、読み取りの視点で読み取ったことを基に、変化を表す構成図を書かせ、類似点や相違点を見付ける学習を行い、それぞれの物語について状況や心情の変化をより明確に捉えさせる(図2)。

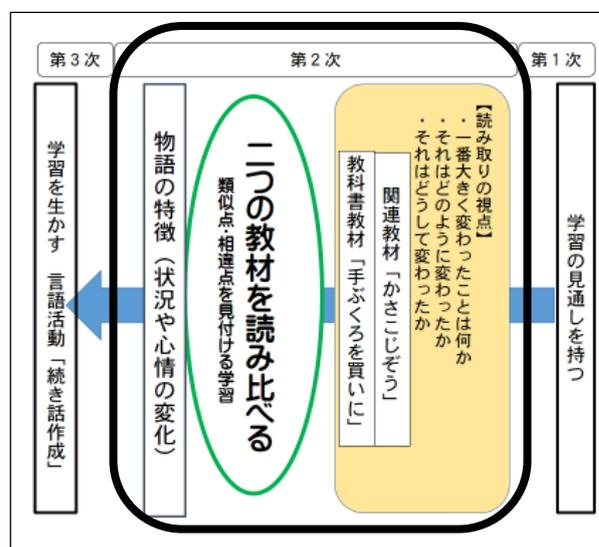


図2 授業の構想

### イ 授業の単元指導計画

第1次【学習の見通しを持つ】を2時間、第2次【状況や心情の変化を読み取る】を4時間、第3次【学習を生かす】を2時間とし、全8時間の単元を計画した。

第2次における教材の取り入れ方は、文献による理論研究を受け、「順次提示型」を採用した(図3)。具体的には、まず第3時で関連教材

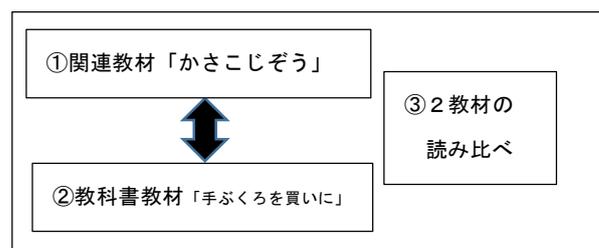


図3 2次における教材の提示順番

「かきこじぞう」を学習し、第4時・第5時で教科書教材「手ぶくろを買いに」を学習する。さらに、第6時で2つの教材を読み比べる学習を位置付け、第3次の学習へとつながる単元にした(表1)。

ウ 実際の授業及び具体的な手立て

(ア) 第3時 関連教材「かきこじぞう」の取り扱い

関連教材「かきこじぞう」の学習では、状況や心情の変化の読み方を確認する。そこで、次の3つの読み取りの視点にしたがって読んでいく。

①一番大きく変わったのは何か

はじめの場面から時、場、人物、様子の叙述を抜き出し、物語の状況設定を確認し、おわりの場面の叙述と比較して、大きく変わったものを想像させる。

②どのように変わったか

大きな変化が起こる場面を山場とし、その山場をみつけることで変容を捉えさせる。

③どうして変わったか

中心人物の行動や会話に着目させて変容の理由を捉えさせる。1枚におさめた教材文と、構成図(図4)を黒板上で対応させ、3つの視点で読み取ったことを交流しながら、学級全体で構成図を作成させる。なお、この構成図は、第6時で教科書教材「手ぶくろを買いに」と読み比べる基となるものである。

表1 授業の単元指導計画

時	学習内容
【1次 単元のねらいを確かめ、学習の見通しを持つ。】	
1	2つの話を紹介する
2	新出漢字の練習や意味調べ
【2次 状況や心情の変化を読み取る。】	
3	関連教材「かきこじぞう」(2年生既習教材)を読む
4・5	教科書教材「手ぶくろを買いに」を読む
6	2つの教材を読み比べ、物語の特徴を捉える
【3次 学習を生かし、「続き話」を書き、交流する。】	
7	状況や心情の変化を生かして、続き話を書く
8	創作した続き話を、友だちと交流する

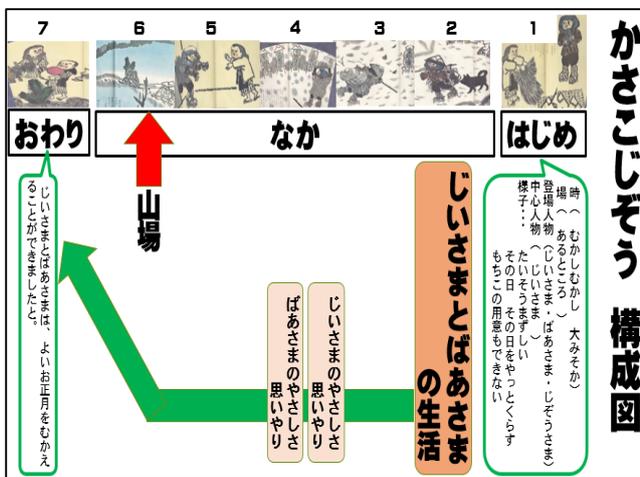


図4 「かきこじぞう」 構成図

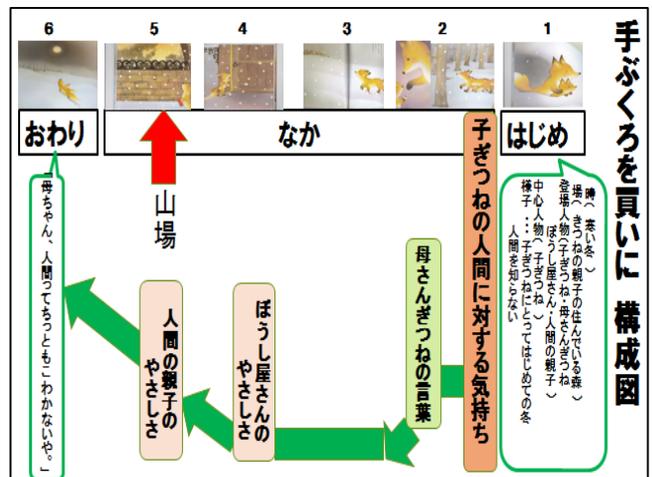


図5 「手ぶくろを買いに」 構成図

(イ) 第4・5時 教科書教材「手ぶくろを買いに」の取り扱い

第3時で作成した構成図を参考にして、3つの読み取りの視点に沿って、状況や心情の変化を捉えさせる。ただし、教科書教材「手ぶくろを買いに」は、児童自身で構成図を作成させ、読み取りをまとめさせていく(図5)。

教科書教材「手ぶくろを買いに」の読み取りの重要なポイントは、山場をどの場面と捉えるかを吟味させるところにあると考える。山場の場面については、子ぎつねがぼうし屋から手ぶくろをつた4の場面と子ぎつねが人間の親子の声を聞いた5の場面で児童が迷うことが予想される。そこで2つの場面から子ぎつねの気持ちの高まりが表れている叙述を抜き出し、比較し、状況や心情の変

化を捉えさせることにした。また、その変化の仕方については、関連教材「かきこじぞう」と相違している点でもあり、第6時で2つの教材を読み比べる際に比較したい内容である。

(ウ) 第6時 2つの教材の読み比べ

状況や心情の変化をより明確に捉えさせるために、第3時・第5時に作成した構成図から、類似点と相違点を見付ける学習を行う。1枚のワークシートに、2つの構成図を縦に並べ、状況や心情の変化を比べ易くする(図6)。

また、児童が、読み取りの視点を忘れていたり、読み取りの視点からずれたりすることがないように、4つのヒントワード(物語の設定、変わったもの、変わり方、変わった理由の比較を促したものを)電子黒板上に示し(図7)、作業の途中でも確認できるようにした。

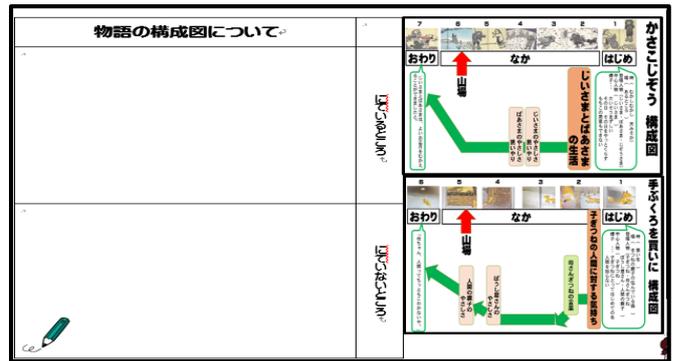


図6 第6時のワークシート

(4) 研究の考察

【検証の視点】 物語の特徴(状況や心情の変化)を捉えることができたか。

ア 学級全児童における構成図及び授業前後のアンケート分析による考察

2つの教材を読み比べる学習が、状況や心情の変化を捉えることにつながったかを学級全体でみるために、第5時に書いた教科書教材「手ぶくろを買いに」の構成図と事後テストで書いた構成図及び授業前後のアンケートの記述を基に考察する。

教科書教材「手ぶくろを買いに」を読み取った後、学習のまとめとして作成した構成図を、3つの観点(心情曲線、山場、変容理由)で分析した。資料1は、叙述を基に3つの観点を記述している児童の構成図である。4・5の場面で少しずつ気持ちが変容していることを心情曲線で表し、山場を5の場面に示し、変容の理由をぼうし屋や人間の親子の優しさといった類の記述をしている構成図である。また、この児童は5の場面を山場と判断した叙述も記述しているので、レベルの高い構成図と考える。

学級全児童の構成図を3つの観点別にみると、平均93.6%(24.3人)が叙述を基に読み取り、構成図に書き表すことができていた(次頁表2)。

次に、第6時で構成図を比較し、類似点や相違点を見付ける学習をした後に行った事後テストの結果を分析する。事後テスト

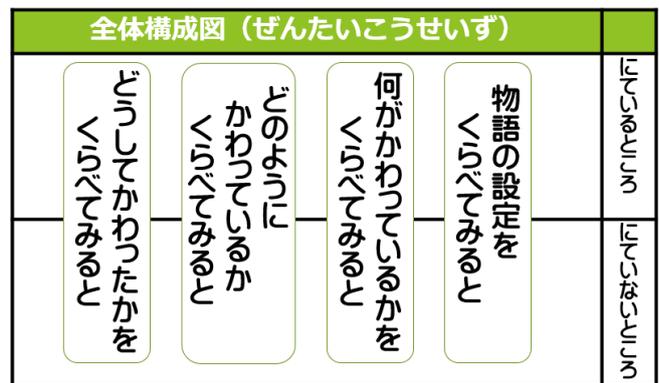
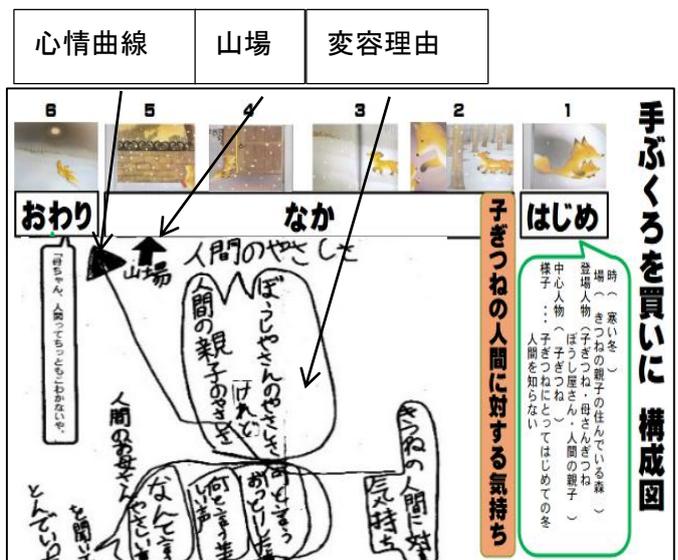


図7 電子黒板上のヒントワード



資料1 第5時「手ぶくろを買いに」構成図



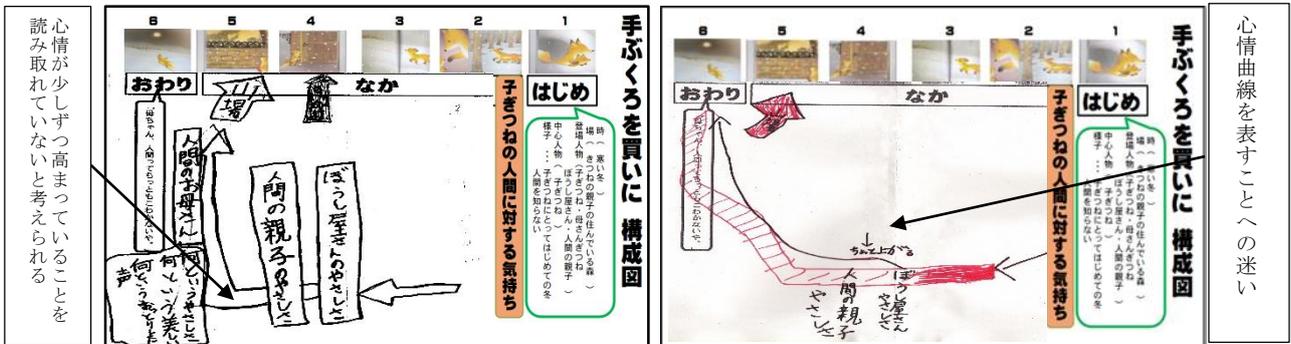
イ 抽出児におけるワークシートの記述の分析による考察

どのように状況や心情の変化を捉えることができたかを、2名の抽出児の第5時の構成図、第6時の類似点・相違点の記述、事後テストの記述を基に分析する。抽出児は、授業前の実態調査の結果より、A児とB児を抽出する。以下に2名の国語に関するプロフィールと実態調査の結果を記す(表5)。

表5 抽出児童のプロフィール

A児	B児
本を読むことが大好きである。授業は意欲的に取り組み、ワークシートやノートは黙々と書く。実態調査では、物語の設定は正確に読み取れているが、状況や心情の変化については読み取ることができなかった。	与えられた課題を真面目に取り組むが、発表を自らすることはほとんどない。学習に時間がかかるため、理解できていないこともある。実態調査では、場面分け、設定及び状況や心情の変化を読み取ることができなかった。

第5時に書いた2人の教科書教材「手ぶくろを買いに」の構成図(資料3、資料4)をみると、A児もB児も、山場の場面や変容の理由は正しく捉えているが、心情曲線は正しく示すことができていなかった。また、授業中のB児の様子を観察していると、一度構成図を書いた後、隣の児童が書いた構成図を見て、心情曲線を上から修正して書き直しをしていた。つまり、この時点で抽出児の2人は、状況や心情の変化の変わり方について十分理解できていなかったと考えられる。



資料3 第5時 A児が書いた構成図

資料4 第5時 B児が書いた構成図

表6は、第6時の授業で、A児とB児はどんな類似点や相違点を記述したかを学級全体の記述傾向の中に示したものである。A児は、類似点9つ、相違点4つを記述し、B児は類似点3つ、相違点5つを記述した。その中でも、変化の仕方の相違点について2人とも記述することができた(表6下線部)。

表6 類似点・相違点の一覧表及び抽出児の記述

分類	類似点(人)【A児・B児の記述】	相違点(人)【A児・B児の記述】
場面構成	・はじめ、なか、おわりがある。(14)【A・B】	・場面の数(8)【A・B】 ・物語の終わり方(会話・地の文)(1)
状況や登場人物の設定	・季節が冬(15)【A】 ・家族が2人(10)【A】 ・中心人物が一人いる(9)【A】 ・家族の一人が出かける(6)【A】 ・やさしい人が登場する(6) ・登場人物がいる(5) ・雪が降っている(5)【B】 ・夜に出来事が起こる(4)【A】 ・場所が人気のないところ(1)	・中心人物が人間と動物(11)【A】 ・登場人物の人数(8) ・中心人物が売りに行く、買いに行く(7) ・場所(7)【B】 ・時(6)【B】 ・動物が出てくる、出てこない(5) ・夫婦と親子(3) ・いいことをした、された(3)
心情や状況の変化	・優しさや思いやりが変化のきっかけ(16)【A・B】 ・最後はいいことになる 矢印が上向きになっている(15) ・山場はおわりの前にある(12)【A】 ・山場がある(10)【A】 ・山場に向かうきっかけの場面がある(1)	・変化の仕方(上がり方)(21)【A・B】 ・終わり方が違う 生活が変化すると気持ちが変わる(13)【A・B】 ・山場の場面が違う(4) ・関わる人物が地蔵様と人間(2) ・人物が2人とも変化、一人のみ変化(1)



## エ 関連教材の選定についての考察

ア、イ、ウの分析結果から、今回の研究では、指導事項を「状況や心情の変化」に絞って授業を行ったこと、学習負担を軽減するために2年生の既習教材「かさこじぞう」を使って順次提示型で教材を提示したことが有効に働いたと考えられる。そこで、関連教材の選定の手順についての考察を行う。

関連教材を選ぶ際は、まず読む目的を明確化することだと考える。学習指導要領の指導事項と主教材の特性を考慮して、この単元でどんな力を身に付けさせたいのかを絞り込むことが大切である。身に付けさせたい力が複数あると、関連教材を選ぶ基準にぶれが生じてしまう。

次に、絞り込んだ力を身に付けるために、主教材と関連教材をどのようにつなぐかを単元指導計画で考える。今回の検証授業のように、状況や心情の変化を捉える力を身に付けさせるためには、第6時で行ったような読み比べをする計画【順次提示型】を立て、主教材と違う変化のある教材を選ぶことが有効だと考える。この他、主教材への興味付けを目的とする場合は、【導入提示型】の計画をたて、テーマや登場人物など共通要素を持っている作品を選択することが考えられる。また、主教材の読みを膨らませるなら、【発展読書型】の計画を立て、同じシリーズや同じ作家の作品を選択することが考えられるであろう。

もう一つ考慮しなければならないのは、児童の実態である。対象学年及び複数教材を取り入れた学習の経験値などの実態を十分加味して、関連教材の内容や文章量、冊数を決めていくことが大切である。中学年や低学年ならば、既習教材を使ったり、一般に読み親しまれている物語を使用したりすることも有効だと考える。

以上の3つの点を網羅できるものを関連教材として選定すれば、児童に読みの学習負担をかけずに、複数教材を取り入れた学習の有効性が得られると考える(図9)。

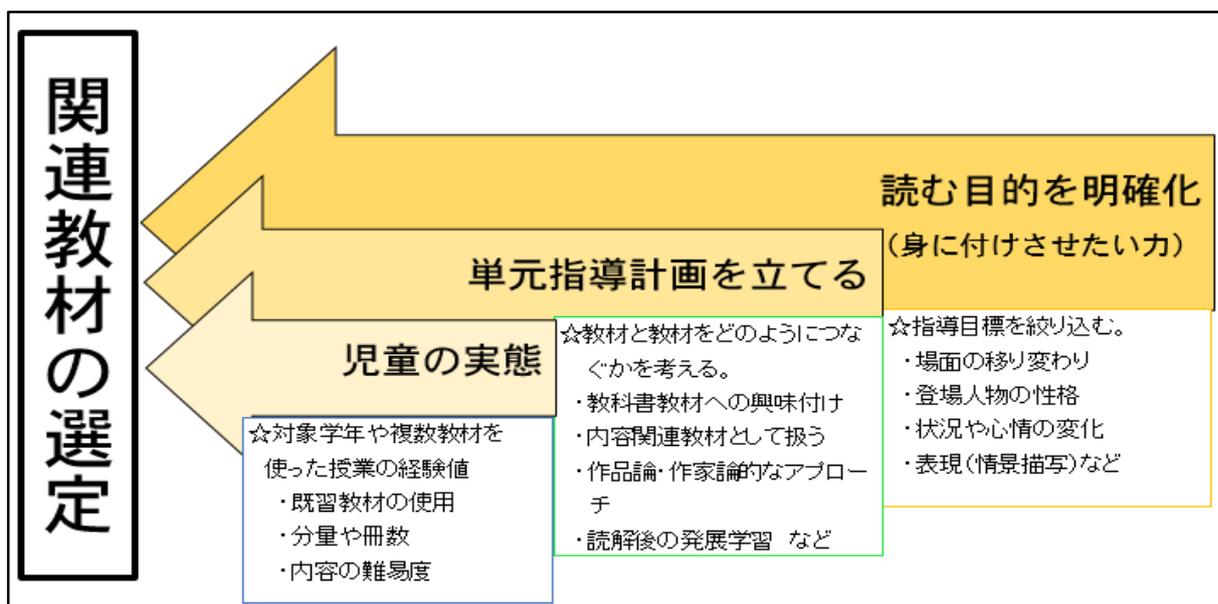


図9 関連教材の選定の手順

## 7 研究のまとめと今後の課題

### (1) 研究のまとめ

本研究では、複数教材を読み比べる経験の少ない中学年の児童の学習指導において、次のようなことが明らかになった。

- ・ 指導のねらいに応じた読み取りの視点で教材を読むことによって、児童自身で教材文の中から必要な叙述を取捨選択し、ねらいに沿った自分の読みを構築していくことができた。また、複数

の教材を同じ読み取りの視点で読むことで、焦点化された叙述同士を読み比べることが可能になり、その類似点や相違点から、物語の特徴を明確に捉えることができるようになった。

- ・ 指導目標に応じた単元指導計画を立て、児童の実態を十分考慮して関連教材を選定したことによって、複数教材を取り入れた学習の有効性が高まることが分かった。

(2) 今後の課題

- ・ 指導目標にあった複数教材の提示の工夫
- ・ 教科書教材の構成や特性の分析及び組合せに適した関連教材の開発
- ・ 高学年の比べ読みへのつなぎ方

《引用文献》

- 1) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 国語編』 平成20年8月 p.62
- 2)3)5) 永池 守 「複数教材を用いた文学的文章の指導の在り方を問う」『月刊国語教育研究』2006年2月 日本国語教育学会 p.10, 12, 15
- 4) 山下 敦子 「小学校国語科における多様な読書活動を取り入れた読解指導・読書指導に関する研究」 2008年3月 大阪市教育センター p.4

《参考文献》

- ・ 山下 敦子 「小学校国語科における多様な読書活動を取り入れた読解指導・読書指導に関する研究」 2008年3月 大阪市教育センター